

## 2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	藤沢 真理子
最終学歴	学 位	専 門 分 野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科 博士後期課程修了	博士	社会福祉学

### I 教育活動

#### ○目標・計画

##### (目標)

基本的な福祉の知識を学び、建学の精神である「真に信頼し事を任せうる」人材となるように、教育活動を進める。

##### (計画)

人間健康学部において 2018 年度前期に担当する科目は、「社会福祉概論」「児童家庭福祉論 a」「児童家庭福祉論 b」「基礎演習 I」「専門演習 I」「専門演習 III」である。

2018 年度後期に担当する科目のうち、「人間と地域」では防災と福祉について授業を進める。ほかに、「地域福祉論」「社会福祉援助技術論」「専門演習 II」「専門演習 IV」「基礎演習 II」を担当する。

医療・福祉・介護関連の企業に多くの学生が就職することを考え、基本的な福祉の知識と技術を学べるように授業を進める。

#### ○担当科目（前期・後期）

(前期) 児童家庭福祉、社会福祉概論、基礎演習 I、専門演習 I、専門演習 III

(後期) 人間と地域、地域福祉論、社会福祉援助技術論、基礎演習 II、専門演習 II、専門演習 IV、卒業研究

#### ○教育方法の実践

「児童家庭福祉」「社会福祉概論」「人間と地域」「地域福祉論」など多人数のクラスでグループワークを実施することは難しいが、2018 年度に方法を工夫し、ディスカッションおよびグループワークを取り入れることができた。学生たちからはグループワーク等で幅広い視点を学ぶことができたと評価された。

#### ○作成した教科書・教材

講義内容に即したパワーポイント資料や動画を作成した。

#### ○自己評価

学生たちが「オンリーワンを一人にひとつ」獲得できるように、授業展開していった。昨年度は本学 1 年目であり、人間健康学部の学生がどのようなニーズを持っているのか把握するのに時間がかかった。今年度は 2 年目となり、学生が何を望んでいるのか理解できたので、学生から将来に役立つと評価された。とくに、「人間と地域」はオリジナルな内容で実施し、毎年学生のニーズに合うように工夫している。積極的に授業に参加し、学生自身も最初はグループワークに戸惑いがあったとのことであるが、回を進めるにしたがって、グループワークの面白さがわかったという評価が多かった。福祉関係の科目はテキストを使用し、人間健康学部の学生が興味関心をもつ内容としているが、さらに工夫していきたいと考えている。

ゼミ活動では、4 年生は就職した時に社会で活躍できるよう知識とスキルを獲得できるプログラ

ムを実施した。3年生は防災を勉強するために集まったメンバーであり、防災に関する基礎知識とスキルを獲得できるプログラムを実施した。防災士試験にチャレンジした学生もいる。2018年度大学祭では、名東区と連携して、認知症サポーター養成講座ならびにGPSを使った徘徊高齢者支援訓練のスタッフとして3年ゼミ生が参加し、大学ホームページで紹介された。2019年度は、3年で学んだ防災の知識を地域の人たちに普及啓発する活動に取り組んでもらうよう計画している。

基礎演習の運営を谷村先生と一緒に担当し、10人の基礎演習担当教員が演習をスムーズに実施できるように一年間活動した。前期のスポーツ大会や後期のプレゼンテーションなどが、特に学生から評価が高かった。

## II 研究活動

### ○研究課題

防災福祉について研究を進める。とくに、高齢者や障がい者など災害時避難する際に支援が必要な人たちを避難できるように準備する「避難行動要支援者支援」について研究を進める。

### ○目標・計画

#### (目標)

現在、市町村の地域防災計画において、避難行動要支援者名簿の策定は義務化されているが、実際にどのように避難するのか、避難行動要支援者個別避難計画の策定ができていない市町村は少ない。避難行動要支援者個別避難計画策定をする際どのような点に留意すればいいのか研究を進める。

#### (計画)

大阪府田尻町において避難行動要支援者個別避難計画の作成を支援してきた。その実践をまとめるとともに、名古屋市名東区の「めいとう総合見守り支援事業」と比較検討していきたい。

### ○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

#### (学術論文)

- ・藤沢真理子「賀川豊彦と関東大震災～100年続く復興支援～」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月、15～32頁。
- ・藤沢真理子「児童福祉に貢献した女性たち～賀川ハルと村岡花子～」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月、1～17頁。
- ・藤沢真理子「防災福祉コミュニティと避難行動要支援者支援」『東邦学誌』第46巻第2号、2017年12月、27～46頁
- ・藤沢真理子「VYS運動の歩み～ボランティア学習理念を中心に～」『聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』23号、2011年、75～92頁（査読あり）

#### (その他)

- ・Mariko Fujisawa “Haru Kagawa and Hanako Muraoka” 賀川記念館(神戸)、2014年  
(<http://core100.net/eng/HaruandHanako.pdf>)

### ○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

### ○所属学会

日本地域福祉学会、日本老年社会科学会、日本社会事業史学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会

### ○自己評価

研究においても、「オンリーワンを一人にひとつ」を目指し、防災と福祉の研究を進めた。2018年度の研究活動としては、防災に関する論文1本と、児童福祉に関する論文1本を作成した。とくに、賀川豊彦の関東大震災復興支援は、その活動が100年続いており、現在、日本の代表的な防災センターである「人と未来防災センター」の礎となっていることを明らかにした。今後30年以内に起こる確率が70～80%となった南海トラフ地震に備えて、賀川豊彦の復興支援はさまざま示唆に富んでおり、神戸の賀川記念館図書室で保管し幅広い人や団体に役立ててほしいと考えている。また、避難行動要支援者支援の研究では、地域との協働は不可欠であり、昨年度研究した神戸市防災福祉コミュニティの取り組みが名古屋市においても役立つことが明らかとなった。さらに、次年度につなげていきたい。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### (目標)

人間健康学部執行部の一員として学部運営にあたる。また、地域連携センター副センターとして地域連携センターの運営にあたる。さらに、研究活動委員会において、研究活動の活性化に努める。

##### (計画)

人間健康学部執行部の一員としては人間健康学部の学生がそれぞれの目的を達成し、卒業時に「オンリーワンを一人にひとつ。」を獲得できるように支援する。また、人間健康学部運営が円滑に進むように支援する。そして、地域連携センター副センターとしては、学生や教職員がかかわっている地域連携活動の一覧表を作成し、それらの活動を広報宣伝することで愛知東邦大学のブランディングにつながるのではないかと考えている。第三に、研究活動がさらに活発になるように研究活動委員として活動する。

#### ○学内委員等

人間健康学部執行部、研究活動委員会委員、地域連携委員会委員

#### ○自己評価

人間健康学部執行部の一員として、人間健康学部の学生がそれぞれのオンリーワンを見つけることができるように支援してきた。今年度は専門演習の形式を変更し、今まで各教員で行っていたゼミ活動をコース制度とした。これにより、コースの特徴が明確となった。また、コース選択や総合演習希望教員の選択を、今年度後期の成績GPAによって配置することとし、学生たちが集中して勉強する様子が見られた。

研究活動委員会委員としては、今までの紙媒体の東邦学誌をウェブベースとした。これらの変更にともなって、東邦学誌の規定を大幅に改定した。また、投稿原稿の校閲を行い、より精度の高い原稿内容に寄与した。

地域連携センター副センター長としては、執行部会議により会議内容を精査し、ATUCCの変更や地域連携活動報告会の開催を実施した。昨年度の報告会では学生たちが最後まで残らず、互いの活動をシェアすることができなかつたので、表彰する形式に変え、今年度は盛り上がった。ただし、口頭発表の方法では大きな問題がなかったが、ポスター発表については掲示方法が見えにくい、それぞれが離れており、真ん中に人が集まってしまったなど反省点があったので、来年度さらに改良していきたい。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### (目標)

名古屋市名東区において、社会貢献をしていく。

###### (計画)

5月13日名東の日・区民まつりにおいて、愛知東邦大学コミュニティカレッジとして開催する認知症サポーター養成講座をサポートし、一人でも多くの人に認知症理解をしてもらう。また、学生が地域の避難訓練や避難所開設訓練に参加するよう促す等で、地域の方々に学生の真面目さが伝わる支援ができればと考えている。

##### ○学会活動等

##### ○地域連携・社会貢献等

###### ①認知症サポーター養成講座

5月13日名東区民祭りにおいて、名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座をサポートし、多くの区民と学生たちが参加し、認知症理解を深めた。また、11月11日大学祭においては、名東区役所、名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座とGPSを使った徘徊高齢者支援訓練を実施した。3年の藤沢ゼミ生がスタッフとして参加し、中日新聞にも掲載された。

###### ②防災講座

2019年1月15日、愛知東邦大学コミュニティカレッジとして、「ママのための防災カフェ」を開講した。参加者は大人5名、乳幼児2名であった。受講満足度は高かった。

###### ③防災ボランティア

2018年度に、名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会と一緒に活動した防災ボランティアのイベントは以下の通りである。

- ・5月27日（日）名古屋市総合水防訓練。
- ・9月2日（日）、なごや市民総ぐるみ防災訓練。
- ・11月17日（土）名東区ボランティア展 in 藤が丘。
- ・11月24日（土）名東区避難所設営訓練。
- ・12月8日（土）名東区避難所リーダー養成講座。
- ・12月27日（木）名東区保健センターにおいて子ども防災教室を開催。
- ・2019年1月24日、名東区社会福祉協議会において災害ボランティアセンター立ち上げ訓練。
- ・2019年1月26日、27日、2月2日、名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座。

##### ○自己評価

春の名東区民祭りと秋の大学祭では、地域連携委員会のコミュニティカレッジとして、名東区役所や名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座を実施した。多くの区民や学生が参加し、認知症理解の普及啓発事業となった。名東区社会福祉協議会からは来年度も開催したいと要望を受けており、実施していきたいと考えている。

防災講座では、小さな子どもを持つ母親たちが、南海トラフ地震のことを心配しているが何から手を付けていけばいいのかわからないという声があり、それに応える目的で、ママのための防災カフェを実施した。非常に評価が高く、また翌日から防災に取り組んでいるという報告をしてくださり、有意義な講座であることを実感した。次年度の課題は、一人でも多くの人に防災の知識を伝えることである。

昨年度はケガのため地域活動に参加することが難しかったが、今年度は名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会と共に、多くの防災イベントを実施した。来年度はさらに、一人でも多くの地域住民に防災の知識や技術を普及啓発していきたいと考えている。

## V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

## VI 総括

教育活動について、愛知東邦大学2年目となり、学生の興味関心を把握できるようになってきた。学生のニーズに合わせた授業展開が行えるようになり、将来に役立つと評価が高くなっている。特に、防災について「人間と地域」という授業で、2年間で延べ250人近くが防災を学ぶ機会を提供できた。最初、興味がないと言っていた学生たちが、防災を自分の問題として取り組み始める姿は頼もしいものであった。来年度は学生たちが地域の人たちと共に活動できるような機会を提供していきたいと考えている。また、ゼミの学生が防災士試験にチャレンジしたり、試験を受けなかった学生たちも積極的に防災に取り組むようになってきた。グループワークを多く取り入れたことで、グループダイナミクスの効果があり、学生たちが主体的に学習するようになってきた。

研究活動では、児童福祉1本、防災1本の論文を作成した。とくに論文「賀川豊彦と関東大震災」は100年近く続く賀川豊彦の復興支援を伝えた。多くの示唆があると、神戸の賀川記念館関係者からも評価が高く、記念館に保管するとのことであった。

社会貢献活動については、昨年度けがのため、思うように活動できなかったが、今年度は名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会とともに多くの防災イベントを実施し、子どもからお年寄りまで幅広い世代へ防災教育できた。また、コミュニティカレッジ講座として、ママのための防災講座を開催することができた。次年度も一人でも多くの人に防災の知識と技術を普及啓発していきたいと考えている。

以 上